

自治労全国一般評議会 事務局長／亀崎安弘



## 組織統合 壁のりこえ前進を

### 大変だった産別統合

全国一般と自治労は、06年1月1日に中央段階での組織統合を行ない、その後、地方段階での統合準備のための3年間の経過措置期間を経、09年1月1日をもって完全統合しました。

組織統合にあたっては、全国一般と自治労のそれぞれが確立してきた運動の歴史と文化、組織運営をお互いに尊重し、対等な立場を基本とし「産別組織統合協定書」に基づき協

議を進めてきました。

統合後、全国一般の各県組織は、自治労各県本部の一単組（合同労組）として所属し、全国一般〇〇地方労働組合と名称変更し、新たな出発を期すことになりました。

そして、県本部との連携を強めつつも、「産別組織統合協定書」にのっとって、これまで通り全国一般評議会が第一義的な責任を持ち、地方労働組合と一体となって、組織と運動の前進に向け取り組んでいくこととなりました。

ここに至るまでの間、経過措置期間の3年間というのは、各県におけるお互いの組織の相互理解、運動の共有化、主体的力量の強化に全力を上げることとし、環境の整った県本部、地方本部の間で「〇〇県連絡会」の設置を進めてきました。

しかしながら、運動の歴史や組織運営の違い、感情的な部分などいろいろな要素もあって県段階の進捗状況には温度差があり、幾多の壁にもぶつかってきました。県連絡会の設置状況は昨年12月になってようやく設置できた県もあれば、設置できないままに08年の師走になって「協定書」を何とか結んで組織統合を迎えた県もありました。

また、私たちが懸命に努力し、「これは産別統合であり、一地方たりとも取り残すことなく全体で完全統合を成し遂げよう」との決意で取り組んできたにもかかわらず、中心

的な一組織が事実上の「組織離脱」を意味する産別会費納入打ち切りを表明する結果にもなりました。

生まれも育ちも違うもの同士が一緒になることの大変さは結婚を経験して知りつつも、この3年間で、組織統合がどれだけの時間と労力を使うか、その大変さをしみじみと感じてきました。

しかし、そうした苦労や経験というものは、これからの自分自身の運動に活かされてくるものだと思っております。いずれにしても、完全統合を成し遂げることができたのは、何よりも関係者のみならず、全国一般と自治労の組合員一人ひとりの理解と懸命の努力があったからだと思っています。

### 組織統合は「出発点」

組織統合は、ゴールではなく、スタート地点に立ったとの思いがいま

す。私たち全国一般は、今後も横たわるであろう幾多の困難を乗り越え、50数年にわたる全国一般・合同労組運動をさらに継承・発展させていくことの決意を新たにしています。

自治労との組織統合効果を活かし、自治労公共民間との共同行動や相互支援として、入札制度の改善や公契約条例の制定に向けた運動、春闘学習交流会、労働相談・組織化対策を取り組んでいきます。

同時に、春闘を含めて、産別を越えた地域での共同運動の実践をこれまで以上に図り、労働者の団結を強め、社会的な運動を作り出していくこと、そのためにもっと体を動かしていくことが必要だと思っています。

それを強く感じさせるのが、いまの厳しい雇用情勢のなかで、新聞やテレビでも報じられている「派遣切り」などです。雇用・生活不安に悩む方たちが、何とか年は越したけれ

ど、この先どうするのかと不安な毎日を送っている現実があります。

私自身も年明けに日比谷の「派遣村」にカンパを持って激励に出かけました。そこには、涙を流し、「人の情けをこれほど感じたことはない」「何とか年を越せてよかった」と訴える元派遣社員。それを支えようと相談活動にかけつけたスタッフ。炊き出しの用意やギター片手に歌声で元氣付けるボランティアの方たちなど、様々な光景がありました。人間というのは支えあって生きていく動物であり、団結・連帯というもの、の素晴らしさを、派遣村で学びました。

そうした思いを抱きつつ、地域労働運動の再構築、09春闘、総選挙闘争、平和と民主主義を守る闘いなど課題はたくさんありますが、運動の前進に向け、この一年、また頑張っていきたいと思えます。